
さあ人生を楽しもう

たんそくレトリバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ人生を楽しもう

【Zコード】

Z4287Z

【作者名】

たんそくレトリバー

【あらすじ】

平和で無害に生活していた男が気がついたら異世界に、
だけど気にすることもなく異世界で平和に生きていく話。（本人談）

だが男の非常識な行動に異世界の人間、魔族問わず巻き込まれていく。

自重？なにそれおいしいの？を合言葉に好き勝手書きます

ギャグやらバトルやら悪知恵やらいろいろ詰め込むつもりですが、
なにぶん初投稿なのでいろいろ不手際があると思います。それでも
良いという方はどうぞ「」ご覧ください

第一話 千本ノックと閃光魔術

なんかいきなり目の前が真っ白になつた。

何だよ誰だよいきなり俺の目の前で閃光手榴弾破裂させた奴、
こんないたいけな一般人に非常識なもん使うんじゃねえよ

ちょっと豪華客船に潜入して乗組員簍巻きにして海に放り投げたり半殺しに
したくらいで大げさすぎだろーが、もうちょっと常識つてもんを考えろよ。

やつた奴出てこいや、千本ノック（守備位置バッターとの距離3M以内）で根性

叩き直してやるからよ、

とかなんとか考えてたらようやく視界が回復してきた。

さあて、どんな仕返しがいいかな。

直径10Mくらいの無人島見つけて素っ裸で置き去りにしてやろうかなあ

（男2人のペアで）

10日もたてばアーッ！な関係になつてるかもしけんまあ気持ち悪いから迎えになんて行かないけど。

少しづつ視界が開けていく中、俺はそこでふと視覚以外の五感で違和感を感じた。

おかしい

さっきまでしていた潮の香り、波の音が消えている
肌に感じていた風もいきなりやんだ
自分は間違いなく船の船首甲板にいたしこは海のど真ん中だ
突然船の揺れが止まるはずもない。
どう考へてもおかしい

有り得ない事態に本能が警鐘を鳴らし即座に行動できるよう体勢を
整え
周囲への警戒レベルを最大まで引き上げつつ視力が回復するのを待
つた。
そして視覚が完全に回復してその違和感は決定的になつた。

「は？」

隣から間抜けな男の声が聞こえた

なぜかそこは船の上ではなく石造りの大きな部屋の中央だった。

「な、なんだ、何が起きたんだ！」

隣の男が騒ぎ出す

身なりからして高校生くらいか
ぱつと見かなり整つた顔をしている

身長は170位、スマートっていう言葉が良く似合つ体格をしている

少なくとも女に困つてることはないな
きっととぼけた顔しながら何人も泣かせてきたんだろう

こいつがさつきの閃光手榴弾の犯人だろうか

スタンクレーネード

おそらくこいつが犯人だろう
いや、こいつが犯人に違いない
てゆうか犯人ということにしよう
イケメンは何時如何なる時、どんな状況でも俺の敵だ、

よし、あとで閃光つながりで閃光魔術シャイニングワザードをかましてやろう
ついでに額に油性ペンで巨乳と書くことも決定だな

べ、べつに私情で犯人で決め付けてるわけじゃないんだからね！！

まあそれはいいとして（後でやるから）

問題はこいつらか

そう思いつつ部屋の壁伝いにぐるりとこちらを囲んでいる集団に田をやつた

なぜか全員中世にタイムスリップしたような格好をしている
全身を覆う鎧を着て槍や剣を持つ兵士達
絵画から抜け出てきたような貴族風の男女共
隣の男以外全員がこちらを凝視している

何だよ、なんか用かよ

イケメンと一般人を比較して楽しいか？

TVの整形手術のBeforeとAfter見比べてるつもりか？
ふざけんなよ、Beforeにも心はあるんだよ！

何が悲しくてあんな無表情になるか！

Afterを誇張しすぎなんだよ！

Before役の人の気持ちもつと考えてやれよ！

とかなんとか考えていたら

「よつこじや勇者様」

何時の間にやら俺ら二人の前に高そうなティアラを頭に付け
金持ちがでかいパーティでしか着そうのないドレスを着た
いかにもな王女サマっぽい女が立っていた。

お前がリポーター役か？蹴りかましてやろうか？
そう思いながら俺は同時に健康通信販売TVの

Before役の人達にエールを送った

第一話 何事も礼儀は大切です

「は、はい？」

隣の男がわけが分からぬといつ顔をしながら王女サマっぽい格好をした女に顔を向ける

「初めまして勇者様、私の名前はエクレール、エクレール・フォン・バイムと申します。」
「バイム王国の第一王女でござります」

「ぼ、ぼくは鷺沼英人さきぬまひとといいます……て、ばいむ？聞いたことない国ですけどそれってどこのある王国なんですか？」

「『存知ないのも仕方ありません、ここはあなた方が居た世界とまったく違う世界で……』

「え、ええ――――――それはいつたいどこの？」

「それは……」

横でやつてる会話に適当に耳を傾けつつ、俺は周囲の状況を確認していた

周囲の人間の数はざつと見4~50人はいるが、ちらりとは距離をとつていてる。

多少警戒してるみたいだな。

近づいてきたのは王女サマのみか、

地面には魔方陣っぽい模様があり俺と鷺沼とかいう男はその中心に

いた

「つまりこの世界には魔神を頂点とした魔族っていうのが人間の生活を脅かしていると？」

「はい、そしてその魔族の脅威から我々を救つてくださる勇者様があなた方なのです、どうか力無き私たちの希望の光となつてくださいませ」

「い、いきなりそんなこと言われても」

大抵こういう奴は結局引き受けるんだよな、んで魔王だか魔神だかを殺つたあと

「姫……」「勇者様……」とかいつてくつ付いてハッピーエンドって流れが王道だよな

けどまあ現実はそう甘くなれそつだぞ

でもいまの俺はそんなことどうでもいいくらいの重要な問題が発生し、人知れず頭を抱えていた。

腹減った

そういうあ今日ろくに喰つてねえや

せつかく豪華客船に乗つたのにせいぜい見たのはパイナップル（手榴弾）くらいか

まあフルーツは食いたくない氣分だつたから投げてくれた人の口の中に

丁重にお返ししたけどな（トルネード投法で）

なんかえらいさわいでたなあ、そんなに俺の丁寧な対応に感動したんだろうか

感動しそぎて爆発してたしな、感動は爆発だ！っていう人なんだろう
礼儀は人間関係を円滑にする重要な要素だからな、俺ほどの人間だと
学ばなくとも自然とできてしまうのだよ

しばらく一人の会話が続いていたが

「わかりました、できるかぎりやつてみますー。」

とこつ勇者サマの一言で場に歓声が広がった。

「ああ」

「なんと凜々しい」

「これで世界は救われるー！」

てな具合にね

ふむ、んじゃまあ場もいに頃合だしあれどもこの本性暴くと
しますかね

「あー盛つ上がつてると」「悪いけど、あんた重要なこと
言つてないぞ」

今まで沈黙を続けてきた俺の言葉に少し驚いた表情をしながら
鷺沼とかいうのとH女が同時にこちらに視線を向けて
て「いかこいつら俺の存在に気づいてたのか
無視されてるからまったく気づかれてないのかと思つてたぜ
イケメンといい女てのは違う次元に居るのかと本気で
思つてしまつとこひだつた。

「俺たちを元の世界に戻せるのか？」

俺の一言で場が静まる、そして一部の人間から俺へと向けられる強い一つの感情

あ、感じてる！ワタシ、感じちゃってる！（殺氣を）
こ、こんなにたくさんの人から感じちゃうなんて！（殺氣を）
ぐ、くやしい！でも感じちゃう！（殺氣を） ピクンピクン

王女はむちむちとまつりてかわってなかなか言葉を発しない

「や、それ「もううんですとも……」

王女の言葉を遮る馬鹿でかい声の主はむちむちと近づいてきた

「あなた方ももと居た世界に帰すこと、これは当然でもあります、
ですがそれにはしばらくの用田が必要でござります、
異世界の扉を開けるには色々準備が必要ですので、
申し遅れました、私はこゝバイム王国の大臣をしてこゝのものでござります」

そう言って深く頭を下げてきたメタボ爺さん、（名前名乗つてたけど忘れた）

「一む、まずそだな、焼く前から失敗確定だらつ、
食つたらスタミナダウンしてしまつ。マンガ肉どつかに落ちてねー
かな、

異世界なんだしさ」らへんにぽろりと落ちてそれなんだけどな。

「もし勇者方様が」」帰還を希望されるのであれば、残念ではござりますが元の世界へ
お送りいたします、ただ先程も申しましたように異界への扉を開けるのには
ある程度の時間が必要でござりますのでその間は王国で貴賓待遇で
応対
させていただきます」

「へー

つまり帰す方法は無い、そして断るなら還す（ナニ）つてことかよ
さあてどうしようかな、

まあ取りあえず飯食わせろ、話はそれからだ
腹が減つてはアーッ！

また感じる！ワタシスッ、ゴク感ジチャツテルウ――！（殺氣を）

第三話 イケメンの顔は潰す為にある

ところが、やつてきました玉座の間の前にはロープでよく見る玉座に座つていてる王冠がぶつたひげもじやジジイ、そして部屋にはさつきの取り巻き共もきているちなみにさつきの姫さんはジジイの横にいる

「おぬしらが召喚された勇者か」

された、じゃなくててめーらがしたんだらうがなんて本音は当然言うわけも無くこじでも俺は黙つていた

「はい、私は鷺沼英人といいます、この世界の平和の為、できうる限りのことをするつもりです」

俺が黙つている理由は一つひとつはこういう堅苦しい空気が嫌いだからこうじうところはイケメン君に喋つてもらつてたほつが絵になるだる

「つむ、よくぞ言つてくれた！おぬしの活躍に大いに期待しているぞ」

それでもうひとつは俺がシャイボーイだからだこんなたくさん人が居る中でなんか話すなんてめんどく・・・

シャイな人間にできるわけないじゃないか、初対面の人には恥ずかしさの余りもれなく目潰し、金的、延髓蹴りをしてしまう俺には難易度が高す

ぎるのだよ。

というわけで王様へのお披露目もすんだのでさつさと部屋を出

「では10日後に早速魔神の住む魔神城におぬしらを連れて行ぐので準備しておくれよ!」

ようとして足を止めた。

ん、んん?今このジジイなんつった?10日?マジンノスマシロ?大魔神の住む家なら東京のどつかにあると想つよ?・
ピンポン押したらフォーカボール飛んでもうしだけど

「え、ええ!…いきなりですか!?」

イケメン君が驚く、無理も無いな、素人が元とはい
メジャーリーガーを相手にするのだ。本氣出されたら三振の山を
積み上げることしかできないだろう。

唯一の勝機はブランクによるスタミナ切れを狙うことか。
もしくはバット持つての乱闘か

「む？ もしやまだ説明しておらんかったか？」

「初めて聞きましたよーー！」

「そうかそれはすまなかつた、なに、心配はいらぬ、
何も魔神を倒してこいといつているわけではない」

長々とジジイの説明が続いたのでまとめる以下のような

- ・召喚された人間が魔神城に漂っている魔力に触れると
なにやら強い力が目覚めるらしい
- ・目覚める力は人によって違うのでどんな力かは
目覚めてみないと分からない
- ・この世界の人間が魔神城の魔力に触れてもなにも起きない
- ・魔神城には特殊な魔法具を使って俺たちだけを瞬間移動させるら
しい
- ・一定の時間（説明からして約1時間程度だと思つ）が経つと

自動的にじゅうに帰つてこれるらしい

- ・城にいっても魔族と戦つたりする必要はまったくない
- ・魔族に遭遇しても召喚されたばかりの人間には不思議な力が働いており、あちらは手出しできないらしい。
ただし、こちらがあちらに手を出すとその効果は即失われる。
召喚されてから約1-5日経つても効果は失われる。

・すぐにあちらにいかないのは、まずこの世界の空気を体に馴染ませてからでないとあちらの魔力に触れた瞬間、体がやられてしまつかららしい

つまり行つて特に何もせず帰つて来いつて事らしい
説明が終わり、今度こそ部屋を出た
イケメン君は姫さんに呼び止められなにやら話していた、
おそらくすでに墮ちているんだろう
ああいうのは何もせずとも女を墮とすからな、
天然のジゴロつて奴だな恋愛ゲームの主人公によくあるタイプ、

隙を見て今度顔を潰してやるわ。

その後なんか個室に案内されたのでそこで用意した食事（マンガ肉は無かった、残念）を食つた後、俺は考えていた。んー、なんか今日一日色々あつたけどどうしようかなあ、丁度あつちの世界は色々めんどくさくなつてきてたんだよなあこの世界は魔法やら何やら色々おもしろそうだよなあもとの世界には多少心残りはあるけど、本当に少しだけだしなあ

具体的には来週の週間少年本読んでおきたかったとか、アレやそれ系の本処分しておきたかったとか、俺の属性が分かってしまうあんなＤＶＤを処分しておきたかったとか

まあ帰る方法も探せばあるだろつけどここで生きていくのも楽しそうだしがんばつてみよー！

さて、取りあえずは10日後に魔神城に行くんだけど・・・せっかくこんな序盤にラスボスの城にいけるんだし、ただ行くだけじゃあつまんないよなあ？

よーし、挨拶代わりにお城の“お掃除”をしてあげるとするかそうと決まれば明日からさつそく行動開始だな。

10日の間に色々準備しておくとしよう

うーん、俺つってなんてやさしいんだろう

聖人君子も俺には及ばないだろーな

冷酷、冷血、冷徹、残忍、残酷、残虐、極悪、非道、そのすべてを

そのときその部屋に誰かがいたら、間違いなく背筋が凍り、恐怖で心臓が止まつていただろう。

蛇に睨まれた蛙のよくなかわいいものではなく、

それこそ魔神に睨まれた何の力も無い子供のよつこ

それほどに彼の表情は

孕んだ

満面の笑みをしていた

「さあ人生を楽しもう」

第四話 世界は矛盾とシンケンでできている

とうえあず次の日、来るべき“お掃除”のために色々と準備するため町にやつてきました

そういう、めんどくわくて（書くのが）色々説明しないことがかなりあるので（の文字はなんだろ？ね、田の錯覚かな？）

今のうちにしておこう

まずこの世界の名前はウルジアといつらしい

金の単位はG^{ゴールド}

言葉は日本語で通じてる、勝手に翻訳されてるみたい
ちなみに字も日本語で書くと勝手にこの世界の文字になるし、
なぜかこの世界の文字も理解できる。

どうやらこの世界に来るとその辺の知識が
勝手に脳内に入るらしい

文化はまさにローブな中世的かんじ
武器や防具が普通に売られており、ごつい鎧着た人が
ガチャガチャ音を立てながら歩いていたり
弓持つた狩人みたいな人もいる。

市場もあり少なくともこの町は活気があるようだ。

おばはんが大きな声を出しながら売り物の果物っぽいものを
行きかう人にアピールしてたり、道具屋っぽい人が自分の薬っぽい

のを

客に説明してたり、あつちこひつちでワイワイガヤガヤと喧騒が聞こえる。

さて、ではこの世界の肝となる部分を説明しよう。

この世界の生物はワーカー（以下WK）と呼ばれる潜在的な職業を持つているらしく、

俗に言う「ジョブ」とはまったく別のこと指している、

この世界での「ジョブ」とは、その人が就いている職業の事を指すこと

に対しWKはその人が持つ潜在能力がどんなものかを分かりやすく職業で表したもの、という感じ

例を挙げてみよう

商売大好きで商人になつたがその人のWKは戦士系だった

その場合、その人は戦士系の才能である力や体力に大きな可能性を持ち、逆に

商人として必要な計算や話術等の才能はあまり見込めないと云うことだ

つまり商人としては大成しにくいということである

ただそれを分かつていながらこの人のようにWKとジョブがちぐはぐな人が
けつこういるのだ。

まあそれには理由があるのだが後で説明する。

話がされたがこのWK、結構深くできているらしい
まずWKはランク制になっているらしく

C B A 特A S 特Sというのを基本としているのだが
Cが一般的な職でAから上のWKはめったにない、
ということ以外未知数らしい。

何しろ才能というものはそれこそ千差万別、人の数だけ存在するの
だ。

現在確認できているWKだけでも軽く3万は超えているが、
(そのうちのA以上で確認できているのは1割満たない) 未確認WK
の
Kの
情報もかなりあるようで
総数は全く把握できないらしい。

しかも同じWKを持つている人でも成長や特徴がまったく違つたり
もする
さつきの戦士を元にロープレ風に例を挙げると

WKが同じ戦士系でジョブも同じレベル20のA、Bがいるとして、
Aは力が高いが技術が未熟、
Bは力は弱いが、技術に長けておりAの使えない技も使える

と、こんな風にまったく違うタイプの戦士がいたりする。

つまりWKは文字どおり人の数だけ存在し、且つ同じだつたとしても
一人として同じ能力、成長ではないのであくまで目安程度にして
おくとよい、ということになる。但し特定のWKやジョブでしか
覚えられない技や魔法もある

さて、では次にそれだけ大量にあるのにどうやってランク分けをして

いるのか?ということになる

答えは簡単で、道具、ていうか石を使えば良いらしい

「ハローー石」と呼ばれるもので、結構一般的なものらしくこれを両手で握り締め、約2分待つと石の色が変化するので、その色で判断できるらしい。

未確認のものもこれでランクの判別が可能。

C 白 B 黒 A 銅 特A 銀 S 金 特S 虹

ところな感じらしいのだが例外として、このランクに入らない特殊なWKが2種類存在する。

1つは犯罪者、これは犯罪を犯した人に追加されるWKでこれを所持している間は、人間としては扱われず、法により守られることも無い、

且つ犯した罪によつて大小の賞金がかけられる。

これを消去するには自身にかけられた賞金の倍額を専用の施設に納めなければならない。尚、これを所持している間ハローー石はその人の元々所持しているWKに関係なく必ず灰色になる

もう一つは固有WK、これは極めて稀なWKと認められたものである種族しか持たない、特殊な育ち方をした等、普通の方法では付くことがないWKである。このWKはものによつては特Sを超えるものもあるらしい。又、このWKの場合ハローー石は上記以外の様々な色に変化する。

方法、といったのはWKはその人の鍛錬や思想、

生き方によつて後天的に変わることがあるものである

CからBに上がつたりもすれば、逆に下がつたりもする
同ランクの全く違うWKになつたりもするらしく、
その際WKの名称も当然変化する。

魔法使い 賢者 戦士 商人のように

つまり最初の例にしたWKが戦士系の商人も後に
WKが商人系に変化する可能性がある、ということである。
例の商人のような人はこれを期待しているのだ、
もちろんそうでない物好きもいるだらうけど

もつとも、全く違つWKになるには、ランクを上げるのと同じくらい
の時間と鍛錬が必要になるらしい。

ただ、ランクの変化にも個人差があるので、
あっけなくランクが上がつたり変化したりもすれば、どれだけ鍛錬
しても
現状のままという人もいる。

ランクが上がると潜在能力の限界値と能力の上昇率も上がるが、
能力 자체が上昇するわけではないので、必ずしも高ランク所持者が
低ランク所持者より優秀とは限らない。

そうそう、俺らが召喚された理由もこのWKにあるらしい。
召喚された人間は例外なくWKが初期から高位らしく、
且つ、ランクアップも極めて早いらしい。
だが、以外なことに今までに「勇者」というWKを持つた
人間はいよいよ、戦士系や魔法使い系の上位系統が

ほとんどどちらも、そのWKに合わせて仲間やジョブを決めていたそうだ。

ちなみに「アンサー」という魔法を使えば、その人のWKやジョブが分かるらしい。

ただ、召喚された人間は力を用意めさせないとWKとそのランクが分からぬこと、魔神城に行くのはそのためらしい。

そしてジョブを変更する方法はWKよりも簡単で、一般的にはレキ符という道具を使う。

使い方になりたいジョブを書き、ハロー一石と同じく両手で2分包む、すると裏にそのジョブなるための条件が書かれるのでその条件を満たせばいいが、条件は人によって全く違う。

ただしレキ符を使ってもなれないジョブもある、その場合は、何か別の条件を満たす必要がある。

（なれないジョブを書いた場合レキ符には何も書かれない。）

ジョブのほうにも固有のものがあり、ある種族にしかなれないものや、

大きな活躍をしてなつたりする、だがWKほど総数は多くない。
(ジョブ自体の総数がWKより遥かに下回るのが理由)

ジョブのランクは

一般職 上級職 最上級職 例外固有職

となつており上にいくほど能力に高い補正がかかるとのこと
ちなみに一般職からいきなり最上級職にクラスチェンジ
することは不可能。

あと、自分が装備できる武具はジョブによって決まっている。
戦士系のWKを持っていても、ジョブが魔法使い系なら
魔法使いの装備できるものしか身につけられない、
ところ」とある。

長々と説明してしまったがこれを聞いた大抵の奴はこうこうはやだ。

なるほど、わからん！…と

心配するな、俺もわからん。

まあそんなのがあると思つてくれてればいい。

長すぎて何言つてるか分からなくなつたりしたしな。

矛盾とかあっても、それは俺が間違えて覚えたことだらうから

気にしないよつ。

なぜなら世界は矛盾で満ちているのだから。

と、締めたといふと説明はここまことにしつゝ。

あとは追々していくので楽しみにしておくよつ。

まあ贋い物贋い物

べ、別にめんどくさいと投げたわけじゃないんだからね！

第五話 薔薇は犠牲を払つてでも守るべし

なーんか面白いもん売つてないかなあ、
といつりついた結果、なかなかいいものが売つていた。

結構一般的に出回つてゐる物のようで、ジジイ王から
もらつた金額で十分買えるものだつた。

そしてあつと/or>う間に10日たち、今俺は魔神城にいる。
使われてない古い空き部屋に飛ばされたらしく魔族側には気づかれ
ていなあ。

隣には勇者サマも一緒にいる。

そういうあ勇者サマは俺よりかなり多く金を王サマから貰つていたら
しく
さらになにに伝わる由緒正しい剣や鎧などもいただいたらしく。
おかげで今の俺らはパツと見英雄とただの一般人に見える。
俺は武器も防具もつけてないからな。

ただまあ、なぜかこの勇者サマ、今大の字になつて寝てるんだよね。
まったくこんなところで寝るなんて信じられないな。
なんで寝てるのか俺には分からんがみんななら分かるかも知れない、
わざわざ起きたことを思い出してみるよ。

こちらに飛ぶ前から話してみよ。

「ヒデト様、どうかくれぐれも無茶はなさいませんよ。」「うん。

「大丈夫ですよ、時間が来るまで大人しくしていきますから」

と、両手を掴みながら見詰め合つ姫とイケメン、共に顔が良いだけに絵になつてゐる。

現在地は最初に召喚された石造りの部屋（儀式の間とこ「うらし」）の魔方陣の上にいる

「ではお一人とも、これに触れてください」

と姫の後ろに控えていたローブを着た魔術師のような奴が差し出してきたのは、サツカーボールくらいの水晶球だった。

水晶の中心にはなにやら城のようなものがおぼろげながら見える。名残惜しそうにイケメンから離れる姫、そして俺とイケメンが水晶に手を置い

たと思つた瞬間に別の場所にいた。

石造りなのは変わらないが部屋が小さくなつておりなんか埃っぽい、部屋の隅には蜘蛛の巣が張つてある。

何より充満している空気が明らかに先程と違つ。

空氣に体全体が圧迫されている感じ、

確かにこれは慣らしておかないときつこだらうなあ、と周りを見ながら思つていた。

「うん、ここなら大丈夫そうだ、時間が来るまでここに隠れているのが良」と思つただけど、

「え?」

と言つながら、ひりに顔と体を向けてくるイケメン君の右膝の上には

なぜか俺の左足が乗つていて、

そのまま俺は階段を駆け上がるかのように右膝を体ごと地面から蹴り上げた、

すると右膝は吸い込まれるよつこ

「ぐあつー」

イケメン君の顔面にHITEした。

見ててくれたか、世のモテない男子諸君、俺はやつたぞ、
君たちの怨敵を一人片付けたんだ。

これで世界は一步平和に近づいたんだ！

俺は一度した誓いは守るのだ、例えそれがどれほど理不尽であろうともー！

自分の浮いた体が地面に着地するまで俺は満足感に浸っていた。

だがそこで俺は自分の大きな過ちに気がついた

「ぐあつ、なんといつことだ、油性ペンが無いーー！」

「これでは誓いを果たせない、額に消えない傷（巨乳）を残すことができない！」

俺はがっくりと膝を落し、両手を地面上につけた。

みんなすまない、俺の不手際でこんなことになってしまった。

何でもつとしつかりと準備を整えておかなかつたんだ！

俺は自分を許せなかつた、千載一遇のチャンスを生かせなかつたのだ。

「だが、俺はあきらめない！ これでどうだ！」

取りあえずそこらへんに落ちてた棒を鼻に一本突っ込んでおいた。

そして話は冒頭に戻る

どうかな、わかつたかな？

分かつた君はおそらくHQB300はあるはずだ。

おそらくこれはフェルマーの最終定理クラスの難問だからな。まあ俺はフェルマーの方は分かるがこれは全く分からぬ。

仕方ない、ここは安全そだしそもそも魔族は手だしきれないんだ
し、
ここで寝ても大丈夫だろ。

俺はお掃除をしなければいけないので行くとする。

ゆっくり扉を開けたが外には誰もいなかつたので辺りの気配を伺い
ながら

部屋を出た。

どうやらここは地下のようだな、辺りは薄暗く、
すぐ近くに階段がありそこから少し光が指している。

さて、んじゃまあ行くとするかな

俺の潜入技術と買つてきたあれらを使い

見事にお掃除を完遂して見せる！

「つむ、異常なし」

と、魔族Aは今日も自分の持ち場の見回りしていた
彼は魔神城の中の魔族で一番下の魔族を統括している立場にある。
本来なら割り当てられた部屋でのんびりできる立場なのが
生来の生真面目な性格のため、自身も持ち場を持ち、見回りをして
いるのである。

彼はまだ知らなかつた、これから起ころる大事件の一端を自分が
担うことになることを。

第六話 魔神城（笑）

その日も魔族Aは異常がないことを確認しつつ、いつもどおり見回りをしていた。

すると少し離れた所にある曲がり角から、見ない顔の下級魔族の姿が見えた。

こちらから声を掛けようとしたとき、向こうが「いらっしゃり気づいて、慌てた様に小走りしながら近づいてこられた。

「はあ・・・はあ・・・は、初めまして、わ、私。ついせ、先日、城の警備には、配属されたもので、ふう・・・はあ・・・、今色んな方々に、挨拶に伺つている所です・・・ふう・・・ふう」

ふむ、新入りか、私は城にいる下級魔族による警備の指揮を執る立場ではあるが、下級魔族を自分で選んで城に配属させることはできない。当然だ、ここは魔神の住む城、すべての決定権は魔神様にある。ということはこの下級魔族も魔神様の御目に留まり、城の警備という誉れ高い役目を賜つたのだろう。

だがどうやら走り回っていたらしく、息もたえだえに話をしており、肩も上下させている。相当あちこちの挨拶回りをしたんだろう。

「そうか、私はお前を指揮する立場にあたるものだ、これからは私の指示に従つよう」・・・しかし見回りをする前からその様子では心もとない、少し休憩してくるといい

かなり疲れている様子だったのでAはそのように声をかけた、しかしその魔族は、

「い、いえ、それよりも重大なほ、報告が・・・はあ、ふう

と、言葉を返した後、その魔族は呼吸を整え、息切れを落ち着かせはじめた。

Aもその方が報告とやらを聞きやすいと思い、落ち着くのを待つた。そしてようやく落ち着いたのか魔族はゆっくりと話し始めた。

「先程も申したとおり、私、先日魔神城に配属されたばかりで、今まで城の方々にご挨拶をしていたのでござります、すると先ほど

を守護しているあの御方・・・えーっと

「ギマルツ様か？」

「あ、はい！そのギマルツ様をお見かけしたのですが・・・」

ギマルツ様か。

数々の人間の強者、勇者を何人も屠り、最強の魔族の一人に数えられている。

魔神様の信頼も厚く、直々に「勇者殺し」のW.Kを与えられた御方。その腕を振れば海が割れ、その足を動かせば大地が震える。最強レベルの魔法をいくつも使え、さらにその身には最高の武具を着けている。

まさに魔族の勇者と呼ぶにふさわしい御方、

ゆえに彼の御方はあの場所の守護を任せているのだ。

そのような御方にお会いできたのだ、この新入りの感動はひとしおのものだうと私は思っていた、だが新入りはそこで

表情を曇らし、その後の言葉を中々口にしなかった。

「どうした、何かあったのか？」

私が尋ねると新入りは顔を俯けながら言った。

「いえ、こんな話を私のようなものがしても信じていただけるかどうか・・・」

「ふむ、取りあえず話してみるがいい、信じる信じないはともかく、話を聞かなければ始まらん。それにお前も誰かにそのことを報告するために走り回っていたんだろう？」

「わ、分かりました、すべてお話を致します。」

私があちこちの方々に挨拶をしながら城を歩いていると、城の一角にある曲がり角に差し掛かったのですが、そこでふと顔を通路の先に向けるとギマルツ様のお姿を見かけました。

私のようなものでも知っているあの噂に名高い御方に会えるなんて、と感動に打ち震え、ぜひ挨拶をと思い近づこうとしたのですが、なにやらどなたかと話をしていらしたのでそれが終わってからにし

よつ

と思い、邪魔にならぬよつ曲がり角に姿を隠して待つておりました。

すると会話の内容が漏れ聞こえてきたので「それこますがその内容が、

「ほひ、召喚された人間か、といつことは「」にはWKを覚醒させるために
来た、ということか」

「来たつてゆうか飛ばされたつて感じだな、気づいたらなんか知らん部屋に

居たんだよ、つてかやつぱり俺が来た理由知つてんだな」

「くくく、今まで何人の人間が召喚されここに来たと思つておる。
しかしWKやジョブも持たぬ人間が力に守られているとはい
このわしと口が利けるとはな、普通なら心臓が止まつておるが」

「あいにく俺の心臓にはラッコ並に毛が生えてるんでね、
ちなみにラッコの体毛の数は世界一位だ」

「・・・意味は分からんが、貴様が豪胆な人間だということはわ
る、

してなにゆえ城内をうろついておる、時間が経つまで隠れていれば
よからう」

「なに、一度あんたみたいな奴を探してたんだよ」

「・・・ほつ」

そこで私はさすがに我慢できず顔だけを出して話しそのする通路を

見ました、
すると

パチン

とこう音がしたと思うとギマルツ様の体が眩く光りだしたのです！

「ぐううううううおおおおおおおおおおおおー、なんだ、これはーー力が、
力が抜けていくーーー！」

「シルブレっていうものらしくてね、魔族の力を
弱めるものらしいよ」

「シルブレ・・・だと、バカな！！シルブレがこれほどの力を
持っているはずがない！体も動かぬ！ぬうううう・・・何をした、
人間！ーーー！」

シルブレとは特殊な鉱石を加工し、それに聖職者が祈りを捧げて完
成する

指先サイズの球体でそれを使うと魔族の力がしばらく低下する、と
いうものです、がギマルツ様のような最上級格の魔族には効果が無

い筈、

なのに！ギマルツ様は片膝を着き、片手で胸を搔き鳴り、もう片方の手で

頭を抱え、とても尋常な御様子ではありませんでした！

「こいつは普通のと違つてね、

本当にとびっきり強力な魔族にしか効果がないっていう変わり物らしい、

シルブレクエスターとか、店主は「大層な名前付けてたけど、用は欠陥品で奴だな、

普通の魔族相手にはただの石ころだしな。

値段も安かつたし……だがまあ、物は使いようだろ？

そつ言つと、私が目にしたその人間は

本当に楽しくてたまらない子供のよつな

満面の笑みをしていました

第六話 魔神城（笑）（後書き）

六話からしばらくギャグが少なくなります、
ギャグばつか書いてたからなんか落ち着かない

第七話 魔神城（笑）ですか？いえKファイアです（前書き）

読み返してみて余りにひどかったので全体的に改訂してみました
これからもちょいちょいやつてしまい御見苦しいかも知れませんが
御了承ください。

第七話 魔神城（笑）ですか？いいえKファイアです

目の前の光景を私は信じられませんでした。

あの、ギマルツ様が何の力も持たないただの人間に膝を屈しているのを、
ですが本当に信じられないのはこの後に起きたことなのです。

「んー、いい感じだねえ、安物なのにいい仕事してるな。」

「貴様・・・ぬうつ・・・しかし、所詮はシルプレであろうが！な
らば効果はすぐに切れる、
その僅かな時間で貴様に何ができる！？」

「ヤレ」で「こつ」の出番なのだよ

その人間はそう言ってズボンのポケットから何かを取り出しました。

「こいつはソウシの笛で奴でね、自分よりも格下の魔族に一度
だけ

命令できるって物らしいぞ。

シルプレとセットで安く売つてたんだよ」

「ふん！どんな考えがあるのかと思えば・・・それで私を操るうとい
うのか？」

いくら力が下がっているとはいえ、何の力も持たぬ人間」ときが
わしより格上になる事など有り得ぬ！」

「気づいてないの？」

「何！？」

「言つただろ？普通のと違つて、あんたに使つたシルブレは確かに5分も持たない、だけど普通のとは違つて一つの効果があるんだよ」

そう言って、人間はその笛を吹きました。

「1つは対象の行動を封じること、もう1つは、効果中の対象はどんな道具の効力も無効化できなくなる、つまりこの二つを使えばあんたは無条件で一度だけ俺の言いなりになってしまふんだよ」

「ソ・・・んな・・コと・・ガ・・・」

「あ、ちなみに命令した後にシルブルの効果が切れても命令された事は実行することになるから、そんとこよろしくね」

「力・・・か・・・ガ・・・・」

「・・・・・

そうしてギマルツ様の田に光が消えていました、そしてそれを確認してから

「んじゃ命令「俺が」ついで合図をしたら城内で大きな騒ぎを起こし、

その混乱に乗じて「魔神を殺せ」いいな?」

人間はそう言って”何か”をギマルツ様に投げ渡しました

「あア・・・わカッタ・・・」

ギマルツ様は何の迷いもなく頷き、その”何か”を受け取っていました

「よし、んじゃそれまで普段どおりに行動してひ

そして、シルブルの効果が切れた後、ギマルツ様は何事もなかつたかのように

通路の奥へ行ってしまわれました。人間はギマルツ様の背中を見送り、軽く

手を振つておりました。すると、

「ああ、ちなみにさつきのあいつの悲鳴は誰にも聞こえてないよ、そういう道具も使つといったからね、だからあいつの異変に気づく奴はいない」

と

「あんた以外」

こちらに背を向けたまま人間は言いました。
私は背筋が凍りついたかと思うほどその場で
動けなくなっていました。

「自分が他人を見ているとき、自分もまた
見られていると思え、ってやつだ、ああ、
今のこと別に言いふらしてもいいよ、
あんたみたいな明らかな下つ端が言つたところで
誰も信じやしないだろうからね。」

そのまま人間はこちらを見ることもなく、
奥の通路の闇に消えていきました。

何を言つてゐるんだね?」
「いつは、

話を聞いた私の最初の感想はそれだった。

こいつ気がふれているんだろうか、それともなにか変なものを喰つたのだろうか、そう思つていた。

あのギマルツ様が人間に操られて魔神様の命を狙う？

有り得るはずがない。

あの方の魔神様への忠誠心は生半可なものではない、死ねと言われば迷いなく死ぬだろう。

殺せと言われば一国の人間を皆殺しにするだろう、だが間違つても魔神様に刃を向けるようなことはしない。

それは、魔族の常識と言えるくらい当たり前のことだ。

と、そこで私は新入りに視線を向けた。

最近城に配属にされたというが私は全くこいつを見たことがない、確かに部下を自分で選ぶことはできないが、

それでも何日かは居るというのに

全く知らないなど有り得るだろうか。

答えは否、となるとこいつは恐らく変装しているのか、目的は今言つたことを私に広めさせ城内を混乱させ、その隙に魔神様を害する、といふところか。

そう頭の中の考えがまとまつた瞬間、私は魔族、いや侵入者に向け、爪を振り上げ飛び掛つた。

「な、何を！」

侵入者は慌てながらも私の爪を紙一重で回避していた。

「黙れ侵入者！そのような戯言を信じる者などこの城、いや魔族の中にいるものか！正体を現せ！！」

「・・・」

私がそう叫ぶと侵入者は顔を下に向けた、
ふん、観念したか。

そう思つていると、侵入者は懐に手を入れ何かを取り出し
私が何かをする暇を『えぬ速度で

ドズッ

「ぐー！」

それをそのまま自分の二の腕に突き刺した

「な！」

取り出したのはナイフ、それをそのまま自分の二の腕に深々と
突き刺したのだ。

そしてその侵入者は顔をこちらに向けこいつ
言い放つた。

「信じていただけないのは承知の上！それでも、このままでは
魔神様の身に危害が及んでしまいます！
信用のあるギマルツ様だからこそ、難なく
魔神様の御前にまで辿り着けてしまいます！」

そうなれば最悪の事態も考えられます！

お望みならばこの四肢切り落としていただいても
かまいません！お願いです…どうか信じてください…！」

腕に刺さっているナイフをもう片方の腕で握り締め、
そういうながらこちらを見る魔族。

刺さっている箇所からは青い血が滴っていた。

青い血…それは魔族の証、いくら人間が姿形を変えたとしても
血の色までは変えることはできない、そしてこの魔族の必死に訴え
る田。

先程までの自分の考えが歪んでいく、

私は間違っているのか？この魔族は真実を訴えていたのか？

「なぜ…下級魔族に過ぎない貴様がそこまでするのだ」

私は気がつけば構えを解き、そんな問いを投げかけていた

「確かに私は下級魔族、ですがそれでも誇り高き魔族の一人！
その私の神である御方の危急を知つていながら何もしないなど
できるはずがありません！！そして神を御守りする為に
どうして自らの命を惜しみましょ…！」

その魔族はゆっくりと、しかしども強い思いを込めながら

そう言った。

私は・・・なんといつひとをしてしまったのだひつ。
この新入り、いや・・・誇り高い戦士を疑つてしまつとは、
軽率な考え方でこの戦士の命を奪つてしまつといつだつた、
自分自身の無能さに恥ずかしくなる。

私は素直に正面にいる魔族に頭を下げた。

「すまなかつた、お前・・・いや、貴公の言ひことまもつともだ、
私とて、貴公と同じ立場ならなんとしてでも仲間に伝えよつ
受け止め、行動しよつ」

「では・・・」

「つむ、貴公の言ひことま信じがたい事だが、私はそれを真実として
受け止め、行動しよつ」

「あ、あつがとうござります!」

その戦士はそこそこながら、がばっと頭を下げてきた。

礼を言つのむこちらのほうだ、貴公のおかげで
私も魔族として大切なものを思い出すことができた。

「さて、ではどうあるか、とこうじと云なるが、

我等のような者が上級魔族の方に言つてもこのようなことは信じていただけまい、また、下手に先にこちらが行動を起こせばその人間も動きを変更してくる恐れがあるぞ。」

私は下級魔族を指揮する立場にはあるがそれでも階級的には精々下の上くらいだ、とても上方には信じてもらえない。

「むう・・・ヒ一人で悩んでいると、何か閃いたのかその魔族は顔をぱつと上げ、口を開いた、

「分かりました、ならばこういう方法はいかがでしょう？」

私は彼の提案に賛成した、現状で我々にできるのは確かにこれが限界だ、だがこれならば魔神様への危険性はグッと下がるはずだ

「つむ、分かった、確かにそれが私たちにできる最良の行動だらうな」

私はそう答えた、すると彼は以外にも、

「ありがとうございます……ですがその前に一つやつておきたい事があるのです」

と、彼は更にもう一つの提案をしてきた。

「私はこれからギマルツ様の元にお伺いしようと思っています」

「何を言うー危険すぎるー」

「あの人間がいつ合図をだすかは分かりません、が、ギマルツ様が受け取つたあの”何か”を奪うことができれば事態は未然に防ぐことができます、何も起きなければそれに越したことはありませんから。」

「貴公は……」

「もとよりこの命は魔神様のものです、それに私が消えたとしても、私の事を信じてくださつたあなた様がいれば私は安心して逝く事ができます。」

彼は死ぬ氣だ、死ぬ氣でギマルツ様の下に行く気なのだ。

「ただ新入りですのでギマルツ様のいらっしゃる場所が分かりません、恥ずかしながら教えていただけないでしょうか？」

そう恥ずかしげに聞いてくる彼を、私は心の底から美しいと思つた。

私は、ギマルツ様の居場所を教えてから無言で彼に握手を求めた、私は彼に同じ魔族として尊敬の念を抱いたのだ。

だが彼は、

「その手は戻ってきてから握らせていただきます。」

そう言って、来た時と同じように小走りをしながら廊下の奥に消えていった。

私は彼の背を見ながら天に祈った。

どうかあの誇り高き勇敢な戦士と再び再開できますよう」と

だが無情にも、この願いが聞き届けられることはなく、
Aと彼が再会する」とは一度と無かつた。

第八話 魔神城（笑）は今日も平和です

ギマルツは魔族の中でも最強の部類に入る強さを持ち、魔神への忠誠心も人一倍持っている。

魔神もそれを分かつてはいるからこそ、彼にこの任務を与えているのである。

ギマルツはこの仕事を誇りに思っていた。
自らの忠誠心を魔神が十分理解していると、

今日も与えられた任務をこなしながらギマルツは、魔神への感謝を思い続けていた。

「あれ？」

するとすぐそここの曲がり角から魔族が姿を現した、姿形から中位クラスの魔族と思われる。

何故かこちらを見て疑問の声をあげていた。

「貴様、ここに何用だ、返答したいではただでは済まんぞー。」

そう言つとギマルツはその魔族を多少加減しつつ威圧した、大抵の魔族、いや生物はこうすれば腰を抜かしてしまつのだ。本気でやればそれだけで命を奪つてしまつこともある、

中級魔族は案の定、尻餅をつき、怯えた様子で慌てて

「あ、おおおおおおってぐだせこーは、話を聞いてぐだせこー。」

そう言いながら早口で話し始めた。

「さ、先程上位魔族の方に『ついさつきギマルツ様が玉座の間に向かっているのを見かけた、随分慌てた様子だつたから恐らくここが無人になつてゐるだらう、私が説明しておくからお前はギマルツ様が戻つてくるまで変わりに任務をこなしておくように。』と言つ指示を与えたのでここに来たのでございま決して嘘偽りなどではありません！！」

「何を馬鹿な」とを、私は今日ずっと「」で任務をこなしておるわ。」

「え、
え？」

「大方そやつが見間違えたのであろうが、能力はともかく、
私に似た武具と体格の持ち主なら上級魔族なら珍しくあるまい」

「 いえ、で、ですが私もしかとこの田で確認しました、
随分急いでいる様子でしたがあれは間違いなく
ギマルツ様でした。」

「何だと・・・？」

私と同じ姿形をした者がいてその者が玉座の間に
向かっている？

「それが虚偽なればどうなるか分かった上でのことであろうな！？」

私はその魔族に先程よりも強く威圧しながらそう質問した。

「このよつな悪ふざけがどうしてできましょつ！私とて無断でここに来ればどうなるかくらいことはよく理解しておつます！」

その魔族は今度は怯えることもなく強い口調でそう答えた。

目や体に不審な動きは見当たらぬ、

「つまり嘘とこつことではないらし、
つまり何者かが私に成り代わつて玉座の間に
向かつてこるということか・・・？」

私がそう呟くと、中級魔族は途端に顔を青ざめた、

「そ、そんな！それでは魔神様のお命が危険です！」

「馬鹿者が、折角変装していながらそのような慌てる態度をとる、その程度の輩に魔神様が遅れをとる分けが無かるうが」

そう、その程度の小物に魔神様を害する事などできるはずは無い、私はそう思つたがその魔族は先程とは別人のように

「何を言つのです！確かに小物かもしだせんがギマルツ様に変装しているのですよ！恐れながらギマルツ様は御自身が想像している以上に魔神様に信頼されているのです！

万が一の事も十分考えられます！」

と、声を荒げながらまくし立てた。

「これから私はすぐに玉座の間に向かい、なんとしてもその侵入者を排除します！

・・・しかし悔しいですが私のような中級魔族がいくら叫んでも誰にも信じて頂けない。

ギマルツ様！どうか私と一緒に玉座の間に来て頂けないでしようか！？」

「む……」

中級魔族は激しい口調でそう言った

確かに侵入者が私に変装していれば、この魔族が何を言つたところで誰も信じることはないだろう。

そもそも中位クラスでは玉座の間に近づくことですきない、その侵入者はそのまま疑われることなく魔神様の下に難なく辿り着いてしまう。

とすれば・・・

魔神様は私に全幅の信頼を寄せててくれている。

この魔族の言つとおり最悪の事態も十分

考えられるか

「よからうつ事は一刻を争つ、すぐに向かうつぞー。」

「は、はい！」

私はその魔族の横をすり抜けそのまま玉座の間に

「ぐふつー。」

べちゃつ

行こうつとすると後ろから咳き込む声と

何か液体が地面に零れた時のような音がした。

私が振り返るとそこには片膝をつき、片手で口を

押さえ、片手を地面につけ、小刻みに体を震わせている

先程の魔族の姿があつた。

口を押さえている手からは青い血がだらだらと垂れている。

「どうしたー?」

「や、やられました・・・あの時。妙な匂いがしていたので
気にはなっていたのですが・・・恐らく侵入者は毒を撒き散らし
ながら移動していたのでしょうか・・・げふつ！」

中級魔族は再び青い血を口から吹き出す

「わ、私は恐らくもう助かりません・・・ギマルツ様、
お願いでござります・・・どうか・・・どうか魔神様を・・・」

御守りして下れい

今それができるのはあなた様だけです

最後の方は耳を近づけようやく聞こえるほどのか細い声
だったが確かにそう言つて、その魔族は地に伏して
動かなくなつた。

私は身に着けていたマントをその魔族に向けて放り投げた、
マントはひらひらと舞いながらその魔族の全身を覆い被した

お前の最後の願いは確かに聞き届けた
だから安心して眠るがいい。

そう私は心の中で思いながらそのまま玉座の間に
駆け出した。

卑劣で卑怯な侵入者、絶対に許しはせん！
私の手で必ずハツ裂きにしてくれる！－

そう思いながら全力で駆けていると、すれ違う魔族達が
何事かとこちらを見る、

「侵入者が玉座の間に向かっている！皆急いで駆け付けよ！」

と私が言つとその声を聞いた魔族達は慌て、戸惑い、驚き
様々な表情を浮かべたが、事態の危険性を察知し

私の後に続いた。

玉座の間の扉は開いていた
普段いるはずの門番も居ない
私は最悪の事態を想定し、
勢いをつけたまま乱暴に玉座の間に入った

玉座の間に居たのは魔神様と

本来その部屋に近づくことすら許されない筈の

一人の下級魔族が居た

第九話 今日ね、家「魔神城（笑）」に誰もいないんだ・・・

「ふむ」

それが私が玉座の間に入つてから初めて言つた魔神様の御言葉だつた。

「まさかとは思つておつたが、こうして実際に起きると信じざるをえんな」

「は、はい、私もまだ信じることができます」

魔神様と下級魔族が会話をする。

「魔神様！ いえ、『アークリンデ様！』『無事ですか！？』

私は叫ぶ、いや、吼える。

「ふむ、そう言つてここまでやつてきたか、中々良い手じやのう」

アークリンデ様は何一つ変わらぬ態度で答える

「まさか、御主程の力を持つた魔族が人間に操られるとはのう・・・おもしろい道具も世の中にはあるものじゃな」

「は？」

アークリンデ様が何を仰つているのか私には理解できなかつた

「まあ当然の反応じゃの、自分が操られていると分かるはずもないし、当時の記憶も無くなつておるのか」

「な、何を言つて……」

「本当に残念じゃのう……まさか御主程の
人材を失うことになるとはの」

そういうて

アークリンデ様がこちらに片手を向けると
周囲一面が真っ白な光に包まれて

「まつ・・・・!」

「勇者殺し」のwkを持ち、最強魔族の一角に
数えられるギマルツの存在は、あつさりと
この世から消え去つた

玉座の間には魔神、アークリンデと
ギマルツが来る前から居た下級魔族
二人のみとなつていた。

Aの

Aは目の前の光景を見て何も言えず暫し呆然としていた。
先刻までそこにいたギマルツも含めた魔族全員、
すべて消え去つていたのである

「しかし今回の勇者は中々面白い方法を使つてくるのう」

ギマルツは魔神の名前を言つていたが、それは極めて高い
クラスの魔族だけが許されることで下級魔族が言えれば
その瞬間に消されることもある。

魔神アークリンデは感心したようにそう言つた

「自分で倒せぬなら敵の部下にやらせる、か
手段を問わぬそのやり方は中々好感が持てるのう、
御主が報告に来なければ面白いことになつていた
じやううな」

くくく、と魔神様はそう言つて微笑んでいた、
確かにもう少し私が来るのが遅かつたら、
こつまであつさりと終わつていなかつただろう。

あの時、私と彼が考えた手とは極めて単純、

ギマルツ様が何か騒ぎを起こした、と判断したり
それより先に玉座の間に行き、事の次第を報告する、
それだけだった。

幸いギマルツ様のいる場所は玉座の間から距離がある、
何かあればこちらのほうが早く辿り着ける。

ただ、私のような下級魔族では普通なら門番に止められる、
そこで少し強引な手を使つた。

彼の持つていた眠り粉を嗅がせて眠らせ、部下に適当な
理由をつけて門番を移動させて介抱するように命令し、
そのまま玉座の間に入つたのだ。

彼は戻つてこなかつた、その事はとても悲しい、
だが事態は最悪の事態を免れたのだ。

彼も天で満足していることだろう

そう思つてみると

「い、一大事でござります！……！」

そう言つて一人の魔族が駆け込んできた

今頃ギマルツ様の報告か、だとすれば遅すぎる。
魔神様もそう思つていたようだ、

「遅いわ、今頃来たところですべて終わつた後じゃ、
妾の命を狙つっていた者はたつた今すべて消えたわ」

そつ仰つたが以外にもその魔族は

「え！い、いえ違います！」

やつぱり、言じられない」とを言ひ出した

「ほ、宝物庫がもぬけの空になつております——。」

「・・・何?」

妾は思わず尋ねる

宝物庫・・・ギマルツが守護している・・・いや、
していた場所。言ひまでもなくそこには魔神城の
すべての金銀財宝や伝説、神話級の武具、希少効果を持つ
道具など、様々な物が収められていた。

それが、全て無くなつた？

宝物庫の鍵は、ギマルツが持つてゐる筈だ、
鍵は妾が直接作つた特別製、先程の

光程度では消滅しない。

ギマルツが消滅しても鍵はそこに残るはず、
だがギマルツの立つていた所には
塵一つ残つていなかつた

ここに来る前に先に持ち出していた？

それなら鍵を持つていない理由が分からぬ

操られたのはつい先程、そもそも持ち出す時間は無い、
しかもギマルツは合図が有るまでは普段どおりに
行動するよう命じられてゐたという、
仮に人間が宝物庫に進入しようとしたところで
命令外の事ゆえ排除されるのは目に見えている。

命令する時に奪つていた？

それならギマルツが鍵が無くなつた事に気づくはず

妾が思考しているとその魔族は続けて話しおした

「つい、今しがた通路でこのよつた物を拾い

宝物庫を見に行つた所、宝物庫の扉が開いており
失礼かと思いましたが中を覗いて見た所、
な、何一つ無くなつており、
変わりにこちらにも壁にこんな物が・・・！」

その魔族はそう言つて一枚のカードを持つていた、
妾が指を動かすとそのカードはふわふわと宙を舞い
そのまま手元に来た、
そして妾はそのカードを読み始める

一枚目・・・その魔族が拾つたカードにはこう書かれていた

宝物庫のお掃除、綺麗に終わりました

第十話 お城の名前はよく考えましょ

時間は少し遡り、ギマルツが宝物庫から玉座の間へ駆けていった直後の宝物庫前

そこに一つの動く影、蠢く物は一つのマント、その下にある物の上半身が突然起き上がり

「ふー」

そこには勇者の鼻に棒を突っ込んだ”彼”がいた、

「うーむ、まさかあそこまで単純とはな・・・もつ少し苦労するかと思ったんだけど・・・」

チヤラ

彼の手に有るのは一本の鍵、それは先程までギマルツが持っていた宝物庫の鍵に他ならない。

「あんな無造作に腰に付けてんだもんなあ、盗つて下さっていつててるようなもんじゃねーか。」

彼がギマルツから鍵を盗つたのはギマルツが玉座の間に

行くことを決意し、彼の横をすり抜けたその一瞬である、

向かい合っていた自分のすぐ右側を通り抜けようと
向かってくるギマルツの右腰に剥き出しに付いていた
その鍵を、右手で掠め取つたのだ、魔神の危機といふこと
動搖していた一瞬の隙を狙つたのである。

「まあ、それだけ自分の力に自信があつたんだろうけど・・・
でも過信はよくねえよなあ」

そつ言いながら被せられたマント退かしながら起き上がる彼、

「ふむ、中々良さそうなマントじゃないか、くれたみたいだし
いただいておくか。」

そう言ひてマントを肩に掛けながら宝物庫の扉の前に近づいていく、
そのマントは良い物どころか伝説級の代物なのだが当然本人には知
る由もない

彼が魔神城に来る前に買った物は三つ、

『ビッククリグッズ お徳用セット』

内容

・化け札2枚

(いくつかの候補の中から選んで変身できる
自分と余りに体格差のあるものには出来ない
変身できるのは10分間、但し変身中に誰かに触られると

時間が残っていても効果は切れる。

一度変身したものには12時間たたないとできない

あくまで外見を変えるだけなので触らなくても

アンサーのような索敵系魔法を使わればすぐばれる)

・刺すと刃が引っ込み刃の根元から赤い液体が出るナイフ

(液体は青色の物に交換)

・口の中で碎くと大量の色の付いた液体の出る飴

(青色を使用、液体は全くの無害)

『眠り粉』

・市販で売られている対魔族用のものと同じだが本来の使い方はほんの少しの量を風に乗せるだけで効果がある
ある程度の力を持つ魔族には効果は無い、
だが彼はAに粉全てをクロロフォルムの要領で門番に嗅がせる用仕向けた為、門番は熟睡してしまった

『メッセージカード10枚入り 専用ペン付き』

これらを使って今の状況を作り出したのだ

具体的にはあの部屋を出た後、手ごろな魔族を見つけ化け札を使い宝物庫の場所を聞き出す。

だが単純に宝物庫の場所だけ聞けば当然疑われる。

そこで宝物庫の門番の出番である

宝物庫の様な重要な場所にはそれ相応の強力且つ、信頼の置ける魔族が居るのは当然である。

そこではまず門番の名前をAから引き出し、そして自分達の事をあえて教え、門番の反乱という有り得ない行為に現実味を持たせ、且つ芝居をしてそれを誰にも言えない様にする。

その後、適当に理由を付けて門番に会いに行くと言い、宝物庫の場所も引き出し、その場を離れ（この辺りで変身が解けて）いる

他の魔族に気づかぬよう今度は宝物庫へ向かう。

そして宝物庫に着いた後、また化け札を使い別の魔族に変身し、ギマルツに偽者の存在を示唆する。

Aとの会話からギマルツは魔神に信頼されている、と思つていてる事を推測し、

それを逆手に取り、偽者の危険性を上昇させた。

結果ギマルツは宝物庫を離れ、玉座の間に向かう。

向かっている途中で魔族に侵入者の存在を話すだらうから当然騒ぎになり、

それはAの耳にもすぐ入り、魔神に報告するだらう。

結果ギマルツと大勢の魔族は消滅し、且つ、ただでさえ宝物庫に近づく魔族は、

少ないのにいつも以上に少なくなる。そして自分は、

「さてお掃除お掃除」

極めて安全に宝物庫に侵入できる

鍵を使い、重々しい扉を開ける、そこには

「うわー、想像以上に散らかつてんなんあ」

体育館程の広さの部屋、その部屋全てが武具、財宝、道具によって埋まつており、さながらアスレチックのようになつていた。

「んー、ここまで」「だらけとは・・・いくらなんでも予定外だな、時間も20分くらいしかないし・・・どうすつかなあ」

そつ言いながら無造作に落ちてゐる本を手に取つた、

・コノ本ノナハ カタログ 蔵書トイウ

- ・「ノ本ニハ持チ主ガ触レタ物ヲページニシテ、トジルコトガデキル
- ・1ツノモノニツキ1ページ
- ・ページニハソノ物ノ名前ト効果、使イ方が記サレル
- ・ページの上限枚数ハ無イ
- ・仕舞ツタ物ヲ取り出スニハソノ物ノ書力レタページヲ本カラ破レバヨイ
- ・本自体ハ持チ主ノ意思デ何時デモ出シ入レ出来ル
- ・本ヲシマツタ状態ダト頭のノ中デ、本ノ中ノ物ヲ検索デキ、ソノ後本ヲ出スト検索シタ物ノページガ開イタ状態デ現レル
- ・生キテイル物ヲ入レルコトハ出来ナイ
- ・ページニナツタ物ハ、ナツタトキノ状態ノママデ保存サレル

頭の中に突然そんな情報が流れ込んできたと思うと、その本はいきなり消えた。
すると使い方が体に勝手に染み込んでいるような感覚になった。

半信半疑で手をかざして本をイメージすると
先程の本が自分の手の中に現れた

「おおう、こいつは便利だな、ご都合主義万歳！」

分けの分からぬことを言いながら彼は本の力で
宝物庫の”ゴミ”を掃除し始めた。

そして”掃除”が終わり、宝物庫が塵一つない状態になつて

「んじや挨拶の手紙でも残しとくかな。」

しておこしてやねり。

魔神も勇者を礼儀正しい人間と認めて後々良い関係が築けるかもし
れんしな。

うーん、俺つて本当に奥ゆかしいなあ、命がけの自分の手柄を世界の為に他人にあげるなんて。」

メツセージカードに勇者からの礼儀正しい御挨拶を書いてから
宝物庫の壁にぺたりと貼り付ける。

たた
じにだけでは気がかかるのに時間がかかる可能性もあるから
近くの通路にもう一枚書いて置いとこう。
さて、名残惜しいけどそろそろ時間かな、

そして彼らが帰った後、時間は戻り、魔神は宝物庫に有つたほうのカードを

読み始めた

拝啓、魔神様。

私は、つい先日召喚された勇者でござります、
今回はご挨拶にお伺いしたく参上しましたが、
御前に行く途中に日に付いたこの部屋と城全体の
余りの散らかりように心を痛め、挨拶代わりといたしまして
勝手ながら掃除をしようと思つた次第で御座います。
ただ、私がこの城に居られるのは極僅かな時間である為、
掃除の分担をしようと思い立ちました。

勝手ながら城全体に散らばつてゐる「ミ」を魔神様の下に集まるよう
しておきました。先程の感じた振動の「ミ」様子ではうまく
いつたようで何よりで御座います。

私もなんとかこのように塵一つ残さず掃除が出来ました。
直接お会いできなかつたのは心残りでは御座いますが、
それは次の機会の楽しみとして残しておく事に致します。
ではくれぐれもお体に気を付けて。

今世紀最高の怪盗にして女性吸引力の変わらない
唯一人のイケメン勇者

アルセーヌ・ビデト・ロソン・サギヌマより

PS 自らの城に自分の名前そのまんま付けるのは
どうかと思います（笑）もうちょっといい感じの

名前付けないとネーミングセンス疑われますよ？

直後

咆哮と共に放った魔神の閃光によつて魔神城は半壊した

第十話 お城の知識はよく考えましょ（後編）

伏線難しいなあ

第十一話 あいつ・・・無茶しやがって・・・

閃光が消え去つて一人玉座の間に佇む一つの影、いや、玉座の間と呼ばれていた場所、今は天井の一部が崩れ、辺りは瓦礫が散乱し、粉塵が舞い、廃墟のようになつていて、その影は魔神と呼ばれる少女だった。

見た目は10代前半の幼さを残す少女、

髪は眩く輝く金色で腰までストレートに伸びており、

黒いゴシックドレスを着ている。

西洋風人形のようなかわいらしい外見だが、

この城の主であり、半壊させたのは紛れも無く彼女である

〔魔神アークリンデ〕

不老の力で無限に近い寿命を持ち、数千年の刻を生きている
その魔力は限界が無いと言われている。

彼女は初めて一つの激情に支配されていた。

「ふ・・・ふふふ、つまりはあれか？妾は勇者の策略にまんまと嵌り
自らの手で多数の忠臣をこの手で殺め、且つ宝物庫の中身を丸」と
盗まれた、ということか…？」

ふふふ、と

彼女は俯きながら自嘲気味に笑っていた
そして突然顔を天に向け、

その咆哮に近い笑い声は先程よりも大きく魔神城に響き渡った。

「面白い……実に面白いぞ……召喚されたばかりの身で
ありながらここまでの手段を講じ、これだけの結果
を出すとは……！」

彼女は笑う、踊りながら
本当に楽しそうに、嬉しそうに

と、文字通り気づかぬうちに魔神に認められたものの、間違つた名前を覚えられてしまつたとうの勇者サマはとこゝと

「いや、これは一体どうしたところの事か……」

「ひ、ヒート様！？」

そのままの状態で城に戻っていた

「くそつ！……だからやめるとあれほど言つたのに……！」

気絶させた張本人が両膝を地面に付け、両手を石床に叩きつける。見る人が見れば本当に悔しそうに見える

「い、一体何があつたのですか！？」

エクレール姫が尋ねる、

気になるのは当然だ、外見も良く、話をしてみても好印象しか抱かず、周囲への受けもいい、そんな期待どおりの勇者様がなぜか鼻に棒を2本突つ込まれ、気絶した状態で帰還したのだ、
気にならないほうがおかしい。

「……俺達があちらに着いて、しばらくしてから運悪く奴らに見つかってしまったんだ。それでもこちらには手を出せないだろうから

このまま時間が経つのをまとつとえていたんだ……」

鼻に棒を2本突つ込んだ張本人は語る、まるで見てきたかのように

「だが奴らは卑劣にも捕らえていたという人間の子供を連れてきて人質にしだしたんだ！」

ざわつ

周囲の人々がざわめく

「俺は、言つたんだ！『絶対にこれは罷だ！何もしちゃいけない！』つて！だがこいつは、『こんな小さな子を見捨てて勇者なんて名乗れない！』

と言つて自分から奴らに触れてしまつたんだ！！！案の定子供は魔族が変身していく、やつらは時間が来るまでこいつをいたぶり続けていたんだ・・・べたつー！俺があの時もつと強く引きとめておけば

こんなことにはならなかつたのに……！」

額に油性ペンで「乳」と書いたが油性ペンが無く、本氣で悔しがつた張本人は語る

「おのれ魔族！..！」

「なんと卑劣な！..！」

「絶対に許せん！..！」

周りの人々が魔族の非道に対し怒りの声をあげる、そんななか、その部屋で最も非道な”彼”は立ち上がり、部屋の出口に向かつて歩き出す

「ど、どうへ？」

おぞらく初めてである、エクレール姫が彼の背に向かつて話しかける

「街にて空氣を吸つてゐる・・・これ以上ここに居ると俺は自分の不甲斐なれと、奴らへの怒りでどうにかなつてしまいそうだ・・・」

彼は振り向く事無く答える、その両の拳と肩を震わせ、いかにも怒りが爆発寸前であることを見せ付けるかのよひに

だが何も知らない人々の中に彼を引きとめよつとする者は居なかつた

そして彼は召喚の間を出て街へやつて來た
あちらに行く時はまだ日は中天にあつたのに
今は日が暮れ、既に真つ暗になつていて
時刻にすると23時過ぎといふといふだらつ
あの移動魔道具が関係してゐるのだらつ

「さて、んじゃ用事も済んだし、この国ともオサラバするか

「ごく普通にそう言つた

いやだつてさあ、城の奴ら明らかに俺のこと消そうとしてるんだよ？

10日の間に”たまたま”警備の厳しい大臣の部屋に”たまたま”入る機会があつたから折角だからと色々漁つてたら裏帳簿と一緒に俺の処遇についてみたいなこと書いてある書類があつたんだよ。内容は簡単にまとめる”あんなのいらねえからさつさと事故死に見せかけて殺つちまえ”つてことでした。

なのでぼくは城を出る前に裏帳簿をひげもじや王の部屋にまとめて置いておいてあげました。

ついでに大臣の部屋にあつた金日の物も全部 カタログ 蔵書にしまつておきました。

どうやら俺が貰うべき金をピンはねしてたらしかつたので利子付けて返してもらつたんだ、決して泥棒じやないよ！

この世界の細かいことは取りあえず別の街で調べるとして、今はさつさとここからとんずらすることを最優先しよう。早くしないといつぱつたいことになりそつだからなあ

そう言いながら俺は宝物庫のおつさんがくれたマントを取り出しそれで身を隠しつつ街を出た、相当大きかつたのでロープみたいに使つことが出来た。

取りあえず北に向かおう、ここからそう遠くない距離に街があるらしい

ことこちらを行き来してゐる商人に教えてもらつた。

人もここよりもらしいし、そこで今後のことを考えていいこう。

ちなみにイケメン君は記憶を無くすように調整して蹴つといたのでもんじいことにはならないと思う

昔殺つた杵柄つてやつですね。

こうして、魔族と人間の戦闘が今まで以上に激化する原因を作つたとうの本人は、

その辺りを散歩するかのような足取りで街を出た

第十一話 ヒロインに手を出す奴はジョンサイドが常識

北に向かいながら俺は蔵書カタログを開いていた
収められたページを確認しながら歩いているのだ
魔神城から今までまともに見る時間が無かつたからな
にこりでじっくり読んでおこうと思つたわけだよ
自分の手札もわからんねえようじや人生という大勝負
には勝てないのだ。

ちなみに今は早朝だ、昨日は取りあえず街から出てすぐの
森に入つて一夜を過ごした。
さすがに見知らぬ場所でしかも真つ暗の中進んでいこう
といつ気にはなれなかつた。

街の宿に泊るのは避けた、すぐに城のファッキン共に
ばれてしまつと思つたからだ。

森なら隠れる場所も食料も困らない、食べれる果実や木の実や、
あの森に凶暴な獣もいないといつことは本で調べていたので
これ幸いと判断したのだ。

ペラペラとページをめぐりながら街道を歩く
辺りは一面の草原、日が上がりかけており
今日も晴れそつだが早朝ということもあり
少し肌寒い、風はそよそよと草木を軽く揺らす程度だ。
まあこの程度の温度なら凍死したり熱中症になることはないだろ？
そう考えて歩いていると興味深いページを見つけた。

これを吹くと龍が1匹呼び寄せられてくる
どんな龍がくるかは吹いた本人によって異なる
現れた龍に自らの力を認めさせれば力になってくれる

おお、来ましたよドラゴン、これは吹かずにはいられない
なぜなら俺は動物が大好きで、特にでかいのが好きなのだ
動物は人間のように騙したり嘘をついたり手榴弾投げてきたり
宝物庫から物を盗んだり鼻に棒突っ込んだりしない、
汚い世間で傷ついた俺の心を唯一癒してくれるのだ
まあドラゴンが動物と呼べるのか、とかいうのはおいて
まあとにかく吹いてみよう

俺がページを破るとそれは形を変えて笛になつていった
宝物庫にあつた奴だがあそこにあつた物は特に見ないまま
ページにしたから形がよく分からん
でつかい角笛みたいなのを想像してたんだがそんなことなかつた
ぱつと見犬笛だつた
まあ形なんてどうでもよかつたので口に当てて吹いてみた

「

」

ふむ、何も聞こえんな、音も犬笛みたいなんだろうか
それとも何か失敗して鳴らなかつたんだろうか
吹き方に決まつたやり方があるとか場所が指定
されているとか、
でもページにはそんなの載つてなかつたけどなあ
うーむ、と考えていると

先程まで雲一つ無かつたのに突然俺の立っている周囲
一面に濃い影がおちた

何だろう、俺の人生お先どころか全て真っ暗つてことを天が知らせてるんだろうか

少しぱネガティブになりながら上を見るとその影の正体がこちらに降りてきていた

全身が美しい銀色の鱗に覆われており日の光が反射し神々しく輝く、そしてその目はルビーのように燃え上がるような緋色だった。

絵とかゲームだと大抵翼一枚だけどこいつは四枚生えてるな

とか色々考へてゐるが、正しくはまだ

俺がこいつを見たときの・・・見たときの最初の感想は

かあああわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！

この世界に来て初めて発した言葉をものす「」でかく叫んでしまつた

でかい体につぶらな瞳、これでもふもふならい「つ」とないんだが
これも十分イイ！－－！

ゆつくりと長い首を曲げながら興味深そうにひざに顔を近づけて
くる

俺の目の前にその顔は来た

そのときの体勢は犬がお座りしながら地面に置いてある物に顔を近づけているのに似ている

ただ犬と違い前足(?)は短く地面に届いていない

俺はナデナデしたい気持ちに逆らわず思いつきりナデナデした
これで死ぬなら本望だ！

ドラゴンは田を細め気持ち良さそうにされるがままになっていた
それを見て俺は決心した

「この力をもつてこの謡のメインヒロインである、異謡は認めない
そうなのだ、この世界にはヒロインが居ないのだ
だがこいつなら十分その重責を果たせるだろ？」

そう考へてゐると、ドラゴンは大きな顔を俺にすりすりとこすり付けてきた

その時俺の何かがぶつんと切れた

もう迷わない、俺はお前と一生生きていく。
俺がお前を養っていく、邪魔する奴は全員虐殺だ

「よし、お前の名前は今日から”ベガーリー”だ」

「ぐるるるるる」

俺はなでなでしながらやつ言つた。ベガーリーは相変わらず
気持ち良さそうに喉を鳴らしている。

うむ、愛い奴だ、

だが、問題が一つあるな

コレだけでかいと人の住むところに行きにいく、

行くたびに騒ぎになりそうだな

まあこいつに手を出す奴は細胞一つ残らず消し去るけどな

「なあベガーリー、お前大きさ自由に変えられないか?」

なでなでしながら聞いてみる。

動物との会話はとても重要な「ミコニケーション」なのだ
あるとくびる」まは

「わわわ」

と言つとポンッと音を立てていきなり小犬並に小さくなつた
ぱたぱた四枚の翼を羽ばたかせながら俺の顔の真ん前にいた
おおつ、でかい時には劣るがコレもまた良しだな
そう考えていたらくろいこまはふわふわ飛びながら俺の頭の上に
着地した。

これはいいな、これなら特に目立たないだろつ
さすがくろいこま、俺の気持ちに素直に答えてくれるとほ

「よし、んじゃ行くかくろいしま」

「あわい」

そつぱつて俺は再び歩き出した
うん、幸先いいな、やつぱりこの世界は面白い。
楽しさなうだなあ

そして彼らの去った後には
くろいしまが着地したときに出たクレーターのような
へこんだ地面が残されていた
それは後にちょっとした騒ぎになるが、
本人達にはものすごくどうでもよかつた

第十二話 初めてのフリゲ、でもフリゲはへし折るもの（前書き）

明けましておめでとうございます
今年もよろしくお願いします
早速作ったのを投稿しました
宜しければ御覧下さい

第十二話 初めてのフラグ、でもフラグはへし折るもの

くろじまを頭に乗せながら俺はまた蔵書カタログを読みながら歩いてくる

くろじまは今丸くなつて寝ている

さつまでは俺が森で集めといた果物を食べていたが
腹が膨れたのか、そのまま寝てしまった

どうやら小さくなると畠袋も小さくなるようだ

一眼レフカメラで撮りまくりたいがこいつの眠りを
妨げるわけにはいかん

仕方ないのでくろじまの寝息をBGMに
「」を読んでいると詫うわけだ

そう思つていると街道の横にウサギがいた
こっちに尻を向けもしゃもしゃ草を食つて
ふむ、ウサギつて大型犬くらいあつたつ
そう思つているとウサギがこっちを向いた
と思つたら突つ込んできた

ふむ、すまないなウサギよ、俺にはすでにくろじまがいるのだ
お前がどれだけ俺を思つてくれてもその気持ちには答えられない
何よりお前からは殺氣を感じる

俺は自分に殺氣を向けてくるなら動物でも容赦はしない
突つ込んでくるウサギは距離3mくらいのところで
思いつきり俺の首田掛けて跳躍してきた。

そして首に噛み付いたと思つた瞬間
なんか地面に叩きつけられていた

俺の顔の前には尻尾がぱらぱらしている
頭の上から下がつてている銀色の尻尾、
それは紛れも無く『まの尻尾』だった
頭の上からは相変わらず寝息が聞こえる
寝ながらでも敵意には勝手に反応するんだろうか?
体型はそのままで尻尾だけ伸ばしてやつたみたいだ
ちなみに『まが』どういう風にしてるかは分からんが
俺が頭を傾けてもずり落ちたりしない
磁石みたいな特殊な力で俺の頭に乗つてるっぽい

ウサギは完全に気絶していた

ふむ、こいつは俗に言う魔物かな?
焼いて食べばうまそうだな
しゃがんで観察しながらそう考えていた

そういうあ魔物と魔族の違いつてなんだろう
知能とかかな?
喰つたときの味で分けられてるんかな?
ふむ、今度魔族の味見でもしてみようかな
そう考えていると動物に似てるがなんか違うのが
他にも何回か結構出てきた

さつきのウサギも良く見てみたらウサギじゃなかつたし
こいつらが俗に言つ魔物、もしくはモンスターなんだろう

そいつらの相手を（くろ『まの尻尾』）していると地平線の先に
建造物みたいなのがよつやく見えてきた

「おおう、なかなか大きそうなこだな」

まだ小さく見える程度だが規模が大きいといつのはなんとなくわかる
このまま行けば昼過ぎくらいにはつくかなあと思つていたら

「わゆう」

とくろじまが鳴いた。

いつの間にか目を覚ましていたのか
寝ぼけ眼を見損ねてしまつた、悲しい

頭から伝わる重心の移動からなにやら一 点を見つめているらしい
なんだ?と思つてそつちを見てみると

街道から東にそれた距離のあるところに人が集まつてゐるのが見えた
人数は20人くらい、キンッキンッと剣撃の音が聞こえる、戦闘中
らしいな

殆どがごろつきや盜賊っぽいぼろい服に武器を持つて一人の人間に
攻撃しているように見える

相手してるのは女かな、一人あんだけの人数相手にできてるところ
見ると

それなりの腕してゐな。

んー、でもやっぱそうだな、動きが鈍くなつてきてる。
怪我してゐるのか妙に行動がぎこちないしな

まあこの世は理不尽で満ちてるんだしこいつもあるだらつ

正直者は損をする、狡賢い奴が得をする

思想は無くとも力があれば勝つことが出来る

弱者が強者に救われるなんて夢物語でしかない
金がない奴は治療もできんし飯も喰えん

美少女はイケメンの元に集まるようになつてゐる
美少女は最終的にイケメンに惚れるようになつてゐる
イケメンは最終的にハーレムを作るようになつてゐる

俺もその理不尽のせいでの「世界」にいるわけだしな

「நீாஜிடீ」

ପାତ୍ରାନ୍ତିକ

ああ
頼む

俺はぐるりおの懸け乗じて語りた

「とりあえずあそこに低空飛行でおもいつきり突っ込め、その後お前は高度を上げて上空から回りに伏兵がいないか見張つてくれ　　あいつらは俺が消す」

「アラム」

くろこまはそう言って4枚の翼を羽ばたかせ、人の群れに向かって

低空飛行で飛び出した

お前のせこで

なんであるなことを

やつぱつこいつが

消えてほじこよ

ああやうだ、世の中は理不~~可~~で出来て~~いる~~、それを~~理不~~可~~な~~やつぱつ~~な~~ね

えよ

人の作った世界に理不~~可~~が無いなんてありえないからな

だから~~つ~~それを甘んじて受け入れるつもつも毛頭ねえ

世の中が理不~~可~~で出来て~~いる~~なら、

”ジン”などやせぬ

それ以上の”非常識”でぶつ壊してやる

くろいじまは顔を置き去りにして滑空する。

低空飛行のせいで地面に生えてる草は根っこを横たわる
そして通り過ぎた後に出来る一本の道

乗ってる俺は当然とんでもない空気抵抗やGを感じるはずなんだが
一切それが無かった

くろいじまが守ってくれてるんだろう、かわいいし出来る奴だ

結構な距離があつたんだがくろいじまに乗つてから数秒くろいじで
もう一〇三くらいのところまで来ていた

そこで俺は勢いをつけくろいじまから飛び降りて

「やあやつー。」

着地点にいた盗賊風の男に飛び蹴りを放つた

返事が無い、ただのモブキャラのようだ

着地点は囲みの一角、くろいまはそのまま一気に急上昇した
みんなにやらほかんとしながらこっちに視線を集めている
襲われた女はかなり顔色が悪かった、あちこち傷がある
もう少し遅ければスリーアウトだつたな
勝負は最終回ツーアウトからなのだ

倒れているモブAの顔を片足で踏んづけたまま俺は言った

「廃品回収業者でーす、要らなくなつたテレビ、冷蔵庫はいざこま
せんかー？」

そう言った後、くろいまが置き去りにした音と風が
俺の真後ろから一気に追いついてきて

俺と囲みの中心にいる女との間に
一本の道が出来た

よひやく我を取り戻したのか

「な、なんだテメエー…ぶつ殺されてえのか！…！」

「こきなりきて分けわかんねえ」と抜かしやがつて……」

「死にたくないけりやすひこんでろや……」

と盗賊風の男達が喚き出した

いちいち盗賊風の男つていうのもめんどいな

上から順にモブB C Dでいいか

みんなかわいそうな服装してんな、服とこつより布切れみたいなの

もいる

武器も鎧びてボロボロの奴ばっかりだな

と考えながら観察していふと

「黙つてんじやねえよ！テメエなにもんだ！？」

モブの一人が尋ねてきた

待つてたよ、その言葉！

「なんだ誰だと聞かれたら！答えてやるのが世の情け！

聞いて驚け見て笑え！あ、俺の名は…！」

なんか色々混じつたような気がするけどまあ気のせいだらつ
そう思いながら近くに居たモブロに延髄蹴りをかました

「ぐえつ…」

モブロの糸の切れた人形のよう崩れ落ちていく様を見ながら

「お前ら粗大ゴミに當つ程安くねえんだよ」

俺はそう言った

「テ、テメエ！名乗る奴じやなかつたのか！？卑怯な真似しやがつて……！」

何を言つてゐんだろ？」のモブロは

「お前ら阿呆か？確かに尋ねられたら答えてやるのが世の情けだけどな

お前ら粗大ゴミにかける情けなんぞ！」の世にや存在しねえー

「

そつとつて、

俺は”この世界で”初めての殺し合いを開始した

第十二話 初めてのフラグ、でもフラグはへし折るもの（後書き）

なんかよしやくまともなのが書けた気がします

第十四話 物持ちが良いと整理できないは紙一重

「めんなさい

前回ラストで殺し合いが始まつたとか言つたけど起りつりませんでした
始まつたのは

一方的な躊躇でした

「「」の野郎！やつらまえ！――！」

モブの頭っぽい奴がそつ言つと一斉にモブ共が襲い掛かつてきました

「へえ、いいのかなあ、そんなこと言つたやつ

俺は余裕でそう答える

「君らが、俺がコレだけの人数相手に一人で来たと思つてゐるの？」

途端にモブ共の動きが止まつた

俺は懐を片手で探り出す

「君らがこの辺で暴れてるつてのは結構噂になつてゐるんだよ？
既に君らに対する討伐依頼も俺以外にたくさん出てて、そいつらも
すぐそこまで來てる。これがその証拠だよ、目玉見開いて良く見て
ね」

盗賊達の視線が彼の懐に集まる

そして彼が懐から取り出したソレは
紛れも無い

紛れも無い

闪光手榴弾だつた
スタングレネード

瞬間

凄まじい閃光があたり一面を覆う

「みえねえ！なにもみえねえ！－！」

「何が起きたんだよおおおおー！？」

はつ、こいつら馬鹿なの？阿呆なの？死ぬの？
闪光手榴弾スタングレードをこんな至近距離から

目玉見開いて見るとか無いわー、マジ有り得んわー
どんだけ素人なんだよ、何勉強してきたんだよ

そつ思いながら近くのモブが持っていたナイフを奪い取つて

「ひゅー」

「かつ」

「ひ」

視界を奪われ悶えているモブ共の合間に縫いながら

首を搔つ切つていった

闪光手榴弾はこっちに来たときこいたまたま持つてた奴だった
物持ちが良ないと良いことあるなあ

「あ」

「ぐつ」

「ひくー」

情けをかける必要は無い、禍根は残さん
一度殺すと決めれば迷わず殺す

迷えばそれだけ自分が危険に晒される

ただ返り血は浴びたくないでのその辺は気をつけて切る
血まみれで街に入れば即お縄になりそうだもんね

3分後、モブ共は誰一人動かなくなっていた　合掌

血がそこら中に散っている

赤いペンキを無造作に大量にぶちまけた感じで

その上にモブさん達が倒れている

切つてる途中で切れ味が落ちたのでその度にナイフを奪い取つて
やつていた

「なまくらばっかだつたな」

そう言いながら最後に持つっていたナイフを無造作に放り投げた
さて、女の方は無事かな

そう思い女の居る場所に視線を向けた

俺が無双してる間、女は剣を持ち、木を背にして背後を取られない
ように

していただが既に立つ気力も無かつたのか腰を落して
まあ閃光手榴弾受けて何も見えて無かつただろうしな

そして今見ると女は横たわってぐつたりしていた

あ、やばい、アレ終わってね？

スリーアウトは防いだけど次のバッターが9番で代打がもう居なくて

相手の守護神出てきたくらいに終わつてゐる気がする

少し小走りで女に近づいて声を掛けようとすると

「ち、近づかないで・・・ぐださー・・・」

モデルのよつと整つた顔立ちをしているが、今その顔はひどく歪んでいる

呼吸は荒く、ひどく憔悴しており、虫の息だ

髪は青みがかつた黒色で、長く後ろにストレートに伸びておひつ後頭部にリボンが結んである

なぜ生きているのか不思議なくらい顔色は悪いが、着てゐる服装は極めて質の良い物というのが良く分かる

だがこれは・・・

正直襲われても仕方ないんじゃないだろうか
そう思えるくらい際どい服装だった

上は胸の上部までが完全に露出しており、

下はかなりのミニスカートで太もも全体が何とか隠れている程度つまり胸中部から太ももギリ下部までしか無い

そんな服装だった、見た目的には一番近いのはチャイナ服にミニスカートか？

白を基調として、細かな意匠もしてあつてかなり良い物だと分かる
だがなにより・・・

でけえ・・・

なんだこれ、こんなでかい人いるの？これってこんなにでかくなる
もんなの？

こんなスタイルの美女つて漫画にしかいないんじゃなかつたの？
ああそつか、こうじうのがイケメン君のハーレムの一員になるのか、

マジ今度会つたらハツ裂きにしよう

ていうか何である時息の根止めておかなかつたんだろう

くそくそくそく、後悔しない人生を送るのが俺の目標なのに早くも挫

折した

試合が終わつた後に殺り残したこと気にづいてしまつた

まあそれは置いといて、

やはりといふかなんというか

しつかりと拒絕されましたね

まあ、仕方ないんだけどね

いきなり現れて敵とはいふ人間を躊躇無く殺しまくつて辺り一面
血の海にした奴に心許すほうがおかしいだろ？

「信用できるのは分かるけど、あんたこのままだとすぐ死ぬぞ？
簡単な手当てくらいしてやるから大人しくしどけ」

女の近くで片膝をついて俺は言った

大きな外傷は見当たらぬがこの顔色は明らかに異常だ
毒か、大きな病氣に罹つてゐる可能性もある

そうだつたらさつさと医者に見せんと手遅れになる

イケメンのハーレム要員になるとはいふ美女を見殺しにするのは
世界の損失だ、どこかの偉い人が言つてた様な言つてない様なそん
な言葉を

思いつつ手当てのために女に手を伸ばすと

「ち、ちがうんです・・・」

弱々しくそう言つた

「助けて頂いたこと・・・には、と、とても感謝しています・・・

ですが、わ、私は
・・・重度の呪いにか・・・かかっていて、触れた人・・・にも、
呪いがう・・・うつてしまふんです
だ、だから・・・

俺は伸ばしていた手を止めた

呪い

人あるいは靈が、物理的手段によらず精神的・靈的な手段で、他の人、
社会や世界全般に対して、悪意をもつて災厄・不幸をもたらす行為

つまりオカルトか

俺はそういうのは興味が無かつたがこっちでは技能として認知
されているのかもしね

呪術師みたいなジョブがあれば説明がつく、
まあ剣と魔法の世界でオカルトが信用できんとか
そんなん頭固いとかつてレベルじゃないしな

「ならあんたなんであいつらとやりあつてたんだ?
もともとここで死ぬつもりだつたなら戦う必要も無いだろ?」

誰にも呪いをうつしたくないから人気の無いこじりで命を絶とうと
した

それなら盗賊と戦闘する理由が無い、その前に死ねばいいのだから

「ま、まだ・・・死ぬ前に・・・やり残した事が・・・あるんです」

そう言つて女は指差す

「私の妹が……ど、奴隸商人に攫われ……たんですね……方々にて、手を尽くしてあの口……グスの商人だということを突き止めてこ、ここにまで、来たんですが……」

ログスといふのはあの街の名前か、んでそこにはいるはずの妹を助けるために呪われてる体に鞭打つてここまで来たが、運悪く盗賊に見つかりつてとこかこの体じや禄に人と接する事も出来なかつただろうに相当苦労してここまで来たんだろ？

「私は、もう……助かりません……でも、い、妹だけは……アーシュだけは、な、なんとしてでも……助けてあげたいんです……」

そつ言つて女は体を起こそつとする、だがもはや立つことも出来ないのか足も手も震えているだけで動かない

「アーシュ……待つててね……お、ねえちゃんがも、もつすぐ……・行くから……」

そつ言つて芋虫のように這いすりながら街に向かおつとする女恐らくもう目も禄に見えていないだろ？闪光手榴弾の効果はとっくに切れているはずだなのに見当違いの方向に行こうとしているさつを指差した方向も街とは全く違う方角だった

人間死ぬときや死ぬ

どれだけ心残りがあるうつとも

死は誰にでも平等に訪れる

死から逃げることは出来ない

死を遠ざけることも出来ない

死は誰にでも突然やつてくる

そつ

「せへ、上等だ」

俺は頭の中で田畠の物を検索してから蔵書を取り出した

本は既に開いてる

俺は田畠のページを破つて取り出した

やのと田畠はせいかりが終わつたのを察したのかくらじが
いかりに降りておもひた

はせいかつた、雲ひとつ無い程に

第十五話 人間観察してゐる人も観察されてゐる

とこゝの街でようやく来たよログスの街
くろこまを頭に乗せて入り口の門をくぐる
遠目で見たとおり結構規模が大きい
時間は昼ちょっとすぎつてとこか

人も多く、そこかしこに店が並んでおり活氣がある

ファンタジーお約束の剣を腰に差した戦士や魔法使いの様な
外見のジジイ、果ては人間以外の人種もいた
エルフっていうのかな、耳が尖つてゐる

あつちのは猫耳生やしてゐる獣人でやつかな

他にも見たこと無いのが結構いたが俺はまず宿屋を探して
いた
適当にそちらの人聞いて金は多少かかるが安全、且つ上質な
所を見つけた

門から続く道が大通りになつていて、そこに沿つて立てられている所
外見は木造3階建てで極めて普通だが良く手入れされているのがわ
かる

安いところだとカプセルホテルみたいな奴もあるからな
さすがにそういうところはごめんこうむる

「いらっしゃい」

中に入るとカウンターの中に恰幅のいいおばさんがいた
働きやすそうな服装で腕まくりをしてゐる

「一人かい？」

「いや一人だ、連れがいる、期間は取りあえず5日」

「食事は?」

「三食部屋に持ってきてくれ、一人分は消化のいい暖かいスープのよつのを」

「ベッドは?」

「ツインで」

「はいよ、前金で清算することになるけどいいかい?」

「ああ」

「じゃあ5日の食事代込みで500G貰うよ」

「分かった」

ツインで一泊100Gか、ロープレとか考えると

結構割高だな

まあアレはレベルと仲間増えることに値段上がるしな

俺はズボンのポケットから適当に金貨（予めページを破つておいた）を取り出しカウンターに置いた
するとおばさんは変な顔をした
何だろう、俺の性癖でもばれたんだろうか?
硬貨置いた動作だけで分かるなんてどんだけ人間觀察しまくつてんだろう

「あんた、この宿丸」と使って泊まる気がい？」

「は？」

意味が分からなかつた

「これ全部G6貨じゃないかい、おばさんをからかうのはよしこれよ」

「じこりく？なんだそりや？」

「あんたもしかして貨幣の種類も知らないのかい？」

「ああ、何せ今まで禄に外に出してもられない身の上だつたんでね、説明してもらえると助かる」

まあ、嘘はついてない。こっち着てから最初の街の外に出たこと無かつたしな

でも買い物はやつたし特に問題無いと思つたんだが

「貨幣には6種類あつてそれぞれの数字がその単位を表してゐるのさ、貨幣に数字が彫られてるだろ？」

それで区別できるのや。

G1貨なら1G、G2貨なら10Gで具合にね
あんたが今出したのは全部G6貨、つまりウン十万も無造作に
出したつてことだよ、おばさんびっくりしたよ」

「見た感じ彫られてる数字以外違ひは無いけど簡単に偽造されたりしないのか？」

「それは無理だね、貨幣には特殊な魔法が施されててね、数字を偽造しても見ればどの貨幣なのか分かるようになつてゐるのさちなみにその魔法を使える人間も厳重に管理されてるもちろん貨幣の原材料の鉱石もね

私欲で使えば即お縛つてこじわ」

なるほどな、俺は貨幣なんて禄に見てなかつたから分からなかつたのか

買い物したときも適当におつり貰つてたしな

貨幣を見ると確かに頭の中にG6と表示される

「わかつた、ありがと」

そういうて余分な貨幣をしまつた

持つてゐる中で一番低いのがG4貨だつたので一枚改めて出した
ピンはね大臣の部屋にあつた奴だらう、元氣にしてるかな?
そろそろ縛り首になつてるかな

「あと、このことは」

「分かつてゐよ、心配しなくても誰にも言わなさい、安心おし」

大事なお客様だからね、と言つておばさんはおつりのG3貨5枚を
出した

「じゃ、部屋に案内するよ」

そつとつてカウンターから出て部屋に向かつおばさん

俺は荷物を担いでそれに続ぐ

「こじてもあんたかわってるねえ」「

部屋に向かう途中におばさんが言ひ

「あたしも仕事柄龍騎士なら何人か見たけど、頭の上に龍乗つける人なんて始めてみたよ」

くろいまのことをいつてるらしい

龍騎士？あれか、空高く飛び上がって降りてきたら味方全滅してやるせない気分になるあれか？

「あたしは知らないけど龍てのは子供の時すぐやって育てるのかい？」

くろいまはあの後また丸まつて寝ている
そういう街つらつらしてた時もなんかちらほら視線感じたな
あれはくろいまを見てたんだろうか

「さあ、俺はこいつしか知らないからな。
他の奴らがどうしてるかは分からんな」

てこつかここつ子供じゃないと思つぞ
全長50m以上あるしな
なんか俺を龍騎士と勘違いしてるらしいがめんべくせこので
そのままにしておく

階段をのぼり2階に来た

通路を進んで一つの扉の前でおばさんが止まる

「はー、いりだよ、鍵はこれ」

やつぱりで鍵を手渡される

「貴重品は自分で管理しておくれよ、失くしたり
盗られたりしても責任は持てないからね」

「ああ」

「食事は出来たら持つて来るよ、ほんとは昼食の時間は終わっている
けど

今回はサービスとしてあげるよ。ただ次からは部屋にいない場合は
食事の時間までに食堂に来ないと出さないからね、
時間の方はカウンターのところに張り紙があるから後で見といてね」

「分かった」

「取りあえず説明はこんな感じだけ何か質問はあるかい?」

「(この街の詳しい情報はどうして聞ける?」

「情報ならやつぱり酒場じゃないかい?」

酒場は出来るだけ行きたくないな、絡まれたら
酒場」と消し飛ばしてしまいそうだ

「それ以外ではあるか?」

「やつだね・・・」

おばさんは少し考えた後、

「金はかかるてもいいなら道具屋に行つてみな、
そこのウンジャで奴なら大抵のことは知つてゐると思つよ」

ふむ、情報屋か、酒場で聞くよりはまつと効率よさそうだな

「ビルにあるんだ?」

「大通りから小道にそれたとこだよ、来たばかりの人は
まづ迷うだらうから食事の時に地図書いて持つて来るよ」

「ありがとう」

「じゃあね」

そうつ言いとおばさんは通路を戻つていった

それを確認してから部屋に入る
ふむ、まあ広さはこんなもんか
部屋の確認もそこに俺は2つあるベッドの一つに
抱いていた荷物をゆっくり降ろした

宝物庫のおっさんマントで包まれた荷物
それをとると、中からほそつきの女が出てきた
先程よりは顔色も幾分かは良くなつており
呼吸も落ち着いている、今は眠つてゐるようだ
女に毛布を被せておく

解呪後の問題はなさそうだ、後は少しずつ良くなつていいくだろ?

「さて、飯食つたら早速行動開始と行くか」

そういういつつ俺も自分のベッドに腰を下ろす
そして先程のことと思い出していた

あの後俺は蔵書から取り出したのは
宝物庫にあつた物だ

・闇祓いの数珠

- ・これを身に付ければどんな呪いも跳ね除けることが出来、
使えばどんな呪いも解呪することが出来る
- ・解呪した呪いは数珠の珠に蓄積し、それをかけた本人の前で割ると
呪いはかけた本人に還つて行く
- ・珠は時間が経てば減つた分は補充される
- ・珠の数は百八個

コレを使って女の体に憑いていた呪いを祓つた
使つた途端女の体からどす黒いもやのような物が
大量に出てきて数珠の珠の一つに吸い込まれていった
その後女は僅かに残つていた意識を失つたが顔色は明らかに先程よ
りも
良くなつていた。なので連れて行こうとしたんだが・・・
氣を失つている女を抱えて街に入れば間違ひなく怪しまれる
下手したら即捕まりかねん

仕方ないのでマントで覆い隠して担いで運んできたというわけだ

まあいきなり部屋に一人いたらあのおばさんも怪しむかもしけんが
あの人なら説明すれば理解してくれるだらう・・・多分

さて、飯まで少し時間あるだらうし今のうがいやる」とやつておへか

俺は女のほうに視線を向けた

第十六話 余計なお世話だ、マジで

やる」と済ませて飯食つて（おばあんは女を見て特に何も言わなかつた）

あれか、『ゆうべはお楽しみでしたね』とでも思つてんのか
いまは毎過ぎだつづーの

地図に書いてある道具屋に向かう

くろしまは今回部屋に置いてきた

悲しいがあいつがいると田立つてしまつたと女の護衛が必要だつた

からだ

果物は置いていつたから食事には困らないだろ？

くろしまにはおばさん以外の侵入者が来たら建物に被害を
出さないように消せと言つておいた

元気に返事をしてくれたから大丈夫だろ？

その時の可愛さに思わず5分程ナデナデしてしまつた

大通りで俺がくろしまを頭に乗つけてるのは

結構見られてるから、目立たないようにおっさんマント
を頭から纏つて宿をでた

大通りからそれた道に進んでいく

そう人通りの少なくない場所にその店はあつた

少し他と違つた造りの家

ただ、出来て結構な年月がたつてのか少しボロイ印象を受ける

ドアノブには「営業中」と書かれた札がぶら下がつていた
ドアを開けると少し暗めの部屋に所狭しと色々な物が置いてあつた
ガラクタみたいなのも有るけどこれも売り物なんだろうか？

「こひつしゃい」

そう思つていてると奥のカウンターから声をかけられた
視線を向けるとおっさんが椅子に座りながら頬杖ついてこつちを見
ている

「何か欲しい物でもあるのかい?」

「知りたいことがある」

「なんだ、そつちの客か」

そういうとおっさんはカウンターから出て俺の横まで来てドアを開け
「営業中」の札をひっくり返して「休憩中」にして、ドアを閉めた

「さて、で、何が聞きたいんだ?」

おっさんはカウンターの中に戻りながら尋ねてくる

「この街で荒っぽい方法で奴隸を集めてる奴の事と
王族クラスの姉妹が行方不明になつた国がないかの一点」

「ふーん・・・それなら5000ドビうだ?」

おっさんは最初の時と同じようにカウンター内の椅子に腰掛けて
頬杖ついてこつちを見る

俺はポケットに手を突っ込みおっさんに向けて親指で弾いた
おっさんはそれを片手でキャッチする

「ほう・・・」

「釣りはいらん、そのかわり・・・」

「分かつてゐる、出し惜しみはしないしあんたの事は誰にも漏らさない、それでいいかい？」

俺が出したのはG5貨、つまり1万Gだ
こういう商売人相手だと最初にケチるところくな事にならん
まあ宝物庫にG5G6貨は大量にあつたしケチる必要もないんだが
「「」で話をすれば外の奴に聞かれるんじゃないのか？」

「それは無い、この家は音を外に漏らさない造りになつてゐる、
その辺は考へてるよ、信頼が大事だからね。ちなみにドアの
札ひつくり返すと外からは開けられない様になる」

防音設計なのかこの家、ファンタジーでもそんな家あるんだな

「さて、んじゃ本題に入ろ」

おつさんは胸のポケットからメガネを取り出しそれを付けて
両肘をカウンターに着け顔の前で手を組みながら話し出す

「この街で裏の奴隸商人は一人しかいない、レッペっていう奴だ」

奴隸になる人間は大抵金が絡んでいる
生活が苦しくなり親が子供を売る

借錢のかたに身売りする

他にあるがその辺の人間を扱う奴隸商人は結構普通にいるし

それは法でも認められている

ただ表があれば当然裏もある

珍しい種族や身分の高い者など、高額になる商品を

非合法な方法で売買する奴もいる

「どんな奴だ？」

「金のためなら何でもかんでも……つていえればわかるだろ?」

まあ当然だらうな、そういう性格じゃなきゃそんな商売しないだろ?」

「そういうの店は?」

「ちよつと待つてな……えーっと……あつたあつた」

そういうつておっさんは奥のガラクタを漁つてこの街の地図を持ってきて

カウンターの上に広げた

「ほひだ、裏通りの一軒家、だけど実際は地下にだだつ広い部屋があつて、奴隸をを管理してゐる」

そういうつて地図上的一点を指差した

街の端つこの細い道を何本も進んだ先、確かにこんな所でもないどんな商売できねえだらうな

「ただ、当然普通の奴は入れないよ」になつてな、常に入り口に見張りがいるんだよ、

入るには見張りに『海ウサギは元氣か?』て言ひな、それが合言葉になつてゐる

ただ見張りの奴も主人に似て欲深い奴が多いからな、初見の奴ならいくらか握らせないと入れてくれんと思つぞ」

「奴隸の人数はどのくらいいるんだ?」

「50はくだらないと思つぞ、結構な身分の奴や希少種族も扱つてゐらしいぜ」

「ヤリと笑う

「うちの目的に目処がついてるんだろうおつさんが笑うな気持ち悪い、豆腐の角に足の小指ぶつけて死ねにしても、犯罪しまくつてのに捕まらないんだなハロー石ですぐわかるんだ?」

「あんなもん何の抑止にもなっちゃいなこせ、いくらでも誤魔化す方法がある、誰もあてにしちゃいないわ」

「へえ」

まあどの世界でも犯罪者つてのは法の田潜つてんだし珍しい事ではないのかもしけんな

「話がそれたな、んでもう一つの方についてだが

」

その後も幾つか話を聞いてから店を出た
地図は頭に残るので目的地にはすぐ着いた

予想通り大通りからかなりの距離がある
日はまだ落ちていないのに路は薄暗く、空気も濁ってる感じがする

例の建物の入り口には情報どおり見張りのよつな男がいた
いかにも下つ端つていう感じの筋肉質にスキンヘッドの
男が扉に寄りかかっていた

俺と田が合つと

「何だ二ちゃん、痛い田合いたくなかったらむかと洩れたほ
がいいぜ」

とほざいた

ああ、昔いたな、同じような事言つた奴、言つた瞬間腕の関節逆に
曲げて
両足縛つて樹海に放り込んだな
俺はそいつに近づいてG5貨を一枚握らせ

「海ウサギは元氣か?」

合言葉を伝えた

男は俺が渡した硬貨を見ると

「・・・はいんな」

そう言ってドアを開けた

ああ、なんかもうくろこま触りたくなつてきた
そう思いながら俺は奴隸商人の店に入った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4287z/>

さあ人生を楽しもう

2012年1月5日22時45分発行